「ハレとケ」通信

第31号

建物にまつわる「非日常」と「日常」の物語をお届けする社外報です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築（31）

「大手前高松中学・高等学校
プールスホール新築工事」

中津万象園を愛した京極のお殿さま、高朗公の漢詩集

「琴峰詩抄に親しむ（5）」

令和３年６月発行

中津万象園に咲く芙蓉の花

「大手前高松中学・高等学校 プールスホール新築工事」

2020年10月に完成した、【プールスホール】。
今回の物語の舞台は、大きな多目的教室二つと普通教室で構成されている、その新しい校舎棟だ。
多目的教室は一学年が一堂に会せるほどの大きさがあり、最先端のICT設備を備えていることも特徴的だが、なぜそのような大きさ、そしてICT設備が、今必要なのだろうか。

また、【プールスホール】のパンフレットの表紙には、「大手前高松のあらゆる未来と可能性がここから開かれていきます。」という言葉が書かれている。
では、「あらゆる未来と可能性」とは何なのか。そして、それをいかにして「建物」の形に具体化させたのか。

大手前高松中学・高等学校の教頭を務める三池先生のお話から、その想いと実現に至る過程を探ります。

「新しい校舎建設の話が出た時、大きなチャレンジだなと感じましたね。簡単な話ではないなと。」

―そう語る三池先生は、49歳のまだ若い教頭先生。大手前に入ったのは平成8年で、美術の先生としての採用でした。入校当時の印象について、伺ってみたところ…。

「採用の際、学校からすれば、美大卒ということで少し警戒したのか、『うちは進学校なので美術だけに集中することはできないけど』という前置きを言われた記憶があります。でも、むしろそれは望むところでした。

なぜなら、『美術』というのは私にとって『ものごとをちょっと違う視点で見るための手法』でもあります。だから、大手前という進学校（ちなみに高松校の場合、令和三年度は3年連続東大合格をはじめ80名を超える生徒が国公立大学に合格。私立大学にも早稲田、慶応など難関私立にも安定的に多数の合格者を輩出している。）で、学力をしっかり付けた子どもたちが、美術を通して広い視野を持てるような試みができることに、やりがいを感じました。」

そして、その時に新鮮だったのが、進学校としての大手前のスタンスだったといいます。

「進学校なら、『勉強して良い大学に入る』ことが目的なのだろうと思っていたけれど、大手前はそれだけではありませんでした。『大学に入る』ことは、世の中に貢献する人間になるための手前の目標でしかない、というわけです。倉田眉貴子理事長は武士道のお話をしたり、本も出されたりしていますが、当時、そんな考えに触れたことがなかったので、とても新鮮でした。」

ただ、その頃は『世の中に貢献する人間を育てる』というスタンスも、学力偏重の社会の中でゆとり教育などが叫ばれていたりと、「『学力をつけること』と、『社会に役立つ人財を育成すること』をいかに両立させるか」に翻弄され続けていた時期だったといいます。

現在は、そのための方法としての『総合的な探究』、つまり「社会的な課題を見つけ、解決策を考え、実行、検証していく」という一連の学びを中心にすえた学習などは、社会で活躍できる人財育成のために各校で導入されています。それは大学や企業でも広く使われている手法ではありますが、でも、社会のことを知らない中高生ではまだ早すぎるのでは？―そう三池先生に尋ねると、

「色々な分野で日本が世界的に遅れをとった国となってしまった今、もっと早くそういった経験を積ませていく必要がある」とのこと。

「社会をまだ知らないからこそ持てる視点、言える意見というのがあるのは事実ですし、今だからこそできる経験や失敗もあります。自分の考えがどう受け入れられるのかを見て、人に伝え巻き込む力も学べます。」。

しかし、大手前が生徒たちに願うのは、『世の中に貢献する』人間となることに留まりません。【建学の精神（品位ある人格の陶冶と、力の教育とを伝統とし、知性情操の両全を目指し、公共の福祉に貢献できる指導的社会人を育成せんとする）】にある通り、指導的社会人、『社会を変える』人材となってほしいと願っているのです。

↑三池教頭先生

では、今の時代における『社会を変える』人材とは、どんな人材なのでしょうか。そして、そういった人材となるには、どんな力を身に付けられる教育をすればよいのでしょうか。

―検討の末、大手前の先生方が注目したのは、自分の考えや望みを『発信する力』でした。

「大勢の人に伝える力を持つということは当然必要ですが、今の時代は、アイデアや考えを自分の中に持っていても、それを発信しなければ誰も見てくれません。世の中に認められ、世の中を変えて行けるような人材を育てようと考えたら、自分の考えや良いところを『売っていく（プロデュースする）』ことを経験して学ぶ機会が必要ですし、自分の考えていることに価値があるのかは、やってみないと分かりません。」。

とはいえ、教育の中に取り入れ、そのような力を磨くにはどうすればいいのか―。「そのためには具体的に何をすればいい？」「どんな空間があればいい？」という手法（建物、設備）を可視化し形にしていくことは、決して簡単なことではありません。

いったいどのように具体化していったのか、三池先生に尋ねたところ、次のような答えが返ってきました。

「今回、プールスホールの大教室には、区切りの無いホワイトボード兼スクリーンを設置してもらっただけですから、発信する力を磨くには足りないように見えるかもしれません。

でも、この空間は、『発信』にはタブレットを使用する、紙芝居のように見せる等色々な方法があることから、たくさんの生徒が同時にいろいろな形でプレゼンできる空間になればいいという考えのもとにつくられています。

この形に決まるまでに、『どうやってその力を磨く？』という実行方法を様々な場面で、先生方と話し合いました。その中で、それに長けていそうな人やそういう教育をしたいと思っている人たちが集まって自然にワーキンググループ的に話し合うことで、計画が進んでいきました。」

“自然にワーキンググループ的に話し合う”。言葉にすれば簡単ですが、実はどんな組織でもできることではありません。なぜ、大手前にはそれができたのでしょうか。

「そもそも大手前には、『熱意がある人の存在から始まる』という空気があります。例えば文科省からの方針通達や指導があった場合、『それが社会にニーズとしてあるなら、うちの学校の中にも、必ずそれに興味を持ち、熱意を燃やす人がいる』という前提から模索が始まるのです。

そうであるなら、そういった熱意、『こんな教育をしたい』という熱い気持ちを持った人をピックアップして渦の中心に据え、教育のやり方やあり様を変えて行くのがいい。もし、誰もやりたい人がいないなら、そんなことをしても

↑多目的に使える大教室

学校には根付かないし、ニーズがないならやる必要はない。―そんな思いがあるんですね。

また、理事長先生は、そういう『熱意を持った人が誰なのか』を見つけるのが上手いんです。それをやりたい人を見つける勘があるというか。『ダメなものはダメ』とハッキリしているかわりに、ニーズがあることについては、熱意ある人を見つけて実行していきます。24時間そのことばかり考えているから、誰がどんなことに熱意を持っているかを常に意識しているのでしょうね。何の教師かや、役割に拘らず、『熱意をもった人』が率先して取り組んでいきます。

もちろん熱意や思いだけでは組織は動きませんから、多くの人や意見を巻き込みながら実現していきます。」

そうして議論が重ねられた末に、プールスホールの使い方が形になっていったといいますが、出来上がった大教室は、プロジェクターを投影するホワイトボードが前壁面の端から端までを広くカバーしており、机や椅子は可動式。大学によくあるような、階段状の席のレイアウトにはなっていないのです。

つまり、『発信する』という言葉から連想しがちな『ステージ』感がなく、『前に立つ人(プレゼンター)』を意識した作りになっているわけではありません。

疑問に思って三池先生に尋ねると、その理由は「フラットな方が使い方を試行錯誤しやすい」から。

自分の考えを発信していく体験は、最初は少人数から始めて人数を増やしていき、最後は体育館で全校生徒を相手に行う形をとっているそうですが(※今は新型コロナウィルス感染症の影響で困難)、今回のプールスホールは、その間を埋める規模のスペースを想定したとのことでした。

ただ、どのくらいの人数で、どんな体験を目的とするかは、まだまだ試行錯誤をしたい。それならば、自由にレイアウト、応用ができるスペースであるほうがよく、階段教室などのレイアウトである必要はない…、そんな考えから、今のスタイルが採用されたのだそうです。熱意を持った人が考えながら現場を変えていくという大手前の運営スタイルに相応しく、可変性を重視した内部となっているのです。

では、『建物の顔』である外観はどのように決まっていったのでしょうか。内部は可変性を持たせることが可能ですが、そう簡単に変えられないのが外観です。

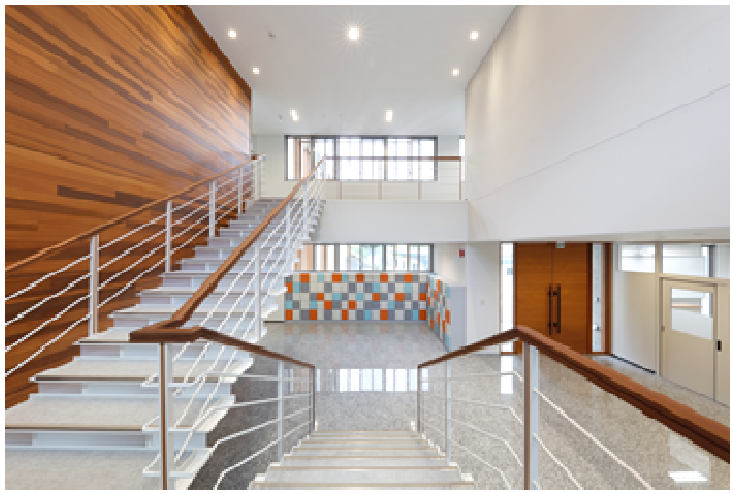
「建物を具体化してくれたのは利庵設計さんですが、学校がやりたいことの『象徴』としての役割を、このホールの外観に持たせてくれたと感じています。

学校が何かをするときは、【建学の精神】を根本において計画するわけですが、その文言そのものやスピリットが、建物の外観に当たると思うのです。

つまり、外観については、建学の精神である【品位ある人格の陶冶と、力の教育とを伝統とし、知性情操の両全を目指し、公共の福祉に貢献できる指導的社会人を育成せんとする】を体現するものであってほしい。

一方で内観や間取りについては、建学の精神の解釈や実行策がその時代に変わっていくのと同じように、使い手に合わせて変えて行けるものであってほしい。

また、建物の外観は毎日見るものです。このホールは新しい試みをする場所ですが、新しいことをするときほど根っこがしっかりしていないと、バラバラになってしまいます。プールスホールの場合、根っこの役割を果たしているのが、建物



↑踊り場からエントランスを見る

ということになります。

利庵設計さんは旧校舎のエントランスの改修も担当してくださっているのですが、その時は、学校創立六〇年を経て卒業生が各界で活躍するようになり、それらの卒業生を輩出してきた歴史や品格を感じさせることがコンセプトでした。」。

たしかに、この建物が奇抜なデザインであったり無機質であったりすれば、ここを使う時の心持は違ったものになるような気がしますが、実際にこの建物を使っている学生や先生からの評価はどうなのでしょうか。

「綺麗だし、広いというだけでも驚いていますね。ナイト・スタディ・サポートという、夜9時迄の自習をサポートする取り組みがあるのですが、それにもこの場所を使っています。学生は自宅通学の子が殆どなのですが、家には色んな誘惑があるから、学校で晩ごはんまでの時間を、あるいは部活が終わってからの時間を、勉強して帰る。公立の学校に行っている子は塾に行くことが多いと思うのですが、塾は『勉強する習慣』にはつながりにくいかもしれませんし、『受験は団体競技』と表現されたりするように、みんなで受験に向かう環境、雰囲気を作ることで、自分も頑張らないといけないという気持ちになります。

但し、最後は自分で考え、悩み、解くことが大事なので、先生がつききりで指導するようなことはしていません。

↑ルーバーから透ける光が印象的

また、プールスホールでは最先端のシステムを採り入れているので、チョークは一切使いませんし、マーカーもそうです。ホワイトボードにプロジェクターで投影しますが、タブレットに専用ペンで書き込んで投影することも、専用のペンでホワイトボードに『書く』ことでまるで実際に書いたかのように見える（実際には書いていない）電子黒板のシステムを使う場合もあります。新しい建物（器）には新しいものを入れやすいので、そういう技術も取り入れているのです。

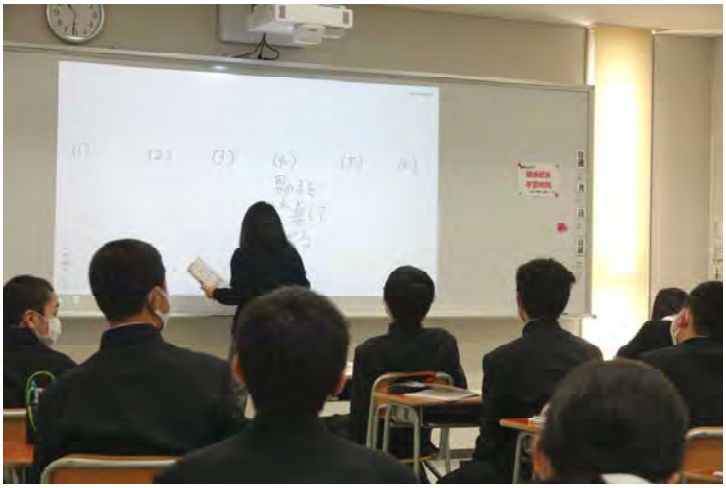
でも、ICTに興味を持たせたり、技術者を育てたりしたいわけではもちろんありません。新しいことを採り入れることを、特別なことではなく当たり前のこととして捉えてもらうことで、幅の広い視点や、多様なものに触れる機会を持たせたいのです。」。

その甲斐あって、利用率は非常に高いと言い、実際に見学に行った際にも、生徒がプレゼンを行っているクラス、先生がタブレットに書き込みながらプロジェクターに投影しているクラス、電子黒板としてホワイトボードに向かっているクラス…と様々な利用方法が見られました。各自のスタイルで、自由自在に使えるのが、このプールスホールの特徴なのです。

最後に、三池先生から、この場所に込めた想いを改めて伺いました。

「世界では、日本人や日本で学んだ人たちが、まだ十分に活躍出来ていません。それを変えて行く人材を、この高松から出したい。そのために何をしていけばいいのか。

学校案内などで、英語教育に力を入れている…という言い方をしたりしますが、それは『英語が喋れれば世界で活躍できる』からではありませんよね。日本語しか知らなければ、世界中にある



↑授業風景。マーカーで書いているようにみえるが、実は違う。

様々な情報の10％程度にしか触れることができないけれど、英語が読めれば、その量は80％に増えるのです。だから、英語を学ぶ。

同じように、大学入試だけなく、その先にあるもののために、教育があります。文武両道を大手前が掲げているのも同じことです。

文も武も、両方に秀でるのは難しいけれど、人間としてはどちらが欠けていてもよくない。両方兼ね備えられるように頑張れた方がいい。

教室

大手前は高校までの学校なので、最後まで手を引いて、教育を完成させてあげられるわけではないけれど、『新しいことを知れば、自分の可能性を広げられるんだ』ということが自然と体得できていれば、この先多くの可能性を子どもたちは手にすることができるでしょう。その出発点に、このプールスホールをしたいですね。」。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

エントランスホール

多様な視点で物事を眺め、吸収し、自分の考えや望みを時には強く、時には柔らかく主張しながら、自分の存在を少しずつ大きく押し広げていくことができれば、必ずや人は、社会を変えることができるのでしょう。そしてそれは、他者の前で自分の『声』を発してみることから始まります。

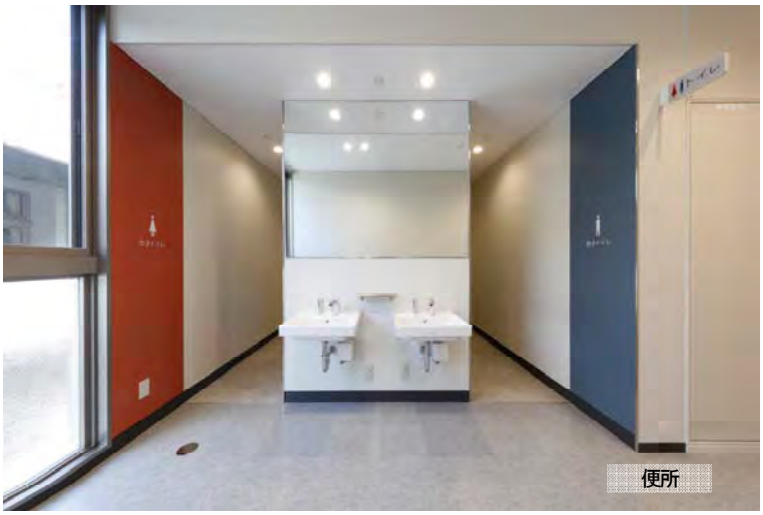
年を重ねることで、声は表情豊かに、内容も密度を増していくかもしれません。でも、素直に声を出せる年齢だからこそ、衒いなく語り始めることができる、語れることがある。

いつかそのことの貴重さに気づき、懐かしく思い出す年齢になった時に、自分の背中を押してくれた場所として、このホールが記憶に残っているならば、幸せだな。

―お話を聞きながらそんなことを考えた、今回の物語でした。

（利庵一級建築士事務所
代表　永野　利枝　氏のインタビュー）

下足箱


便所

「心動かされる」記憶が、建築を形にする

利庵一級建築士事務所
代表 / 永野 利枝 氏 インタビュー

「大手前高松のあらゆる未来と可能性がここから開かれていきます。」―このプールスホールの精髄ともいえる言葉を生み出したのは、実は利庵一級建築士事務所の永野さんです。知的で凛とした、でもどこか優しい雰囲気があり、その作り出す建築の世界にファンの多い建築家です。

その永野さんに、プールスホール設計について、お話を伺ってきました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

―大手前高松中学・高等学校の校舎に携わるのは、今回で2件目となりますが、きっかけは何でしたか？

「最初に担当したのはエントランス改修で、突然学校からお電話をいただいたのが出会いです。おそらくその時、どこか別の設計者さんとも打ち合わせをされていたのかもしれませんが、私の方で担当をさせていただけることになりました。」

―その時学校側から示されたイメージは、どんな内容だったのでしょう。

「善通寺の偕行社の玄関みたいにしてほしい、というご希望がまずありました。そして、理事長のお話しされる『トラディショナル、クラシカルなものと現代との融合』というキーワードや、校章に託された『五つのペン』『自分を映す鏡』といった言葉をヒントに、空間を組み立てていったという感じです。」

―「言葉から組み立てて」という表現が印象的ですが、そういった、相手の言葉からイメージを組み立てていく…というのは、永野さんは得意な方なのでしょうか。

「そうですね、自分で言うのもおかしいですが、どちらかというと相手の言葉を汲めるタイプだと思います。相手の意向に添いたい、形にしたいという気持ちが強い。そしてそこに自分のテイストをのせるわけですが、機能が伴わないデザインは好きではないんです。だから、私の設計には例えば、無意味な曲線はあまり使いません。

『カッコいい』だけでは嫌で、『これはどうしてこういうデザインなの？』と聞かれた時に、『こういう理由なんです』と説明ができるデザインが好きだし、そんな話をするのが好きですね。」

―とてもよく分かります。利庵一級建築士事務所による大手前高松の2件目のプロジェクトが、今回のプールスホールになるわけですが、学校から最初に永野さんが出された提案書を見せていただきました。拝見すると、外観デザインは最初の提案時からほとんど変わっていませんよね。

「大手前高松を訪れると感じますが、既存の校舎を本当に大切に使っていらっしゃいますし、実際に、とてもいい建物です。ですので、あの建物のデザインを踏襲するというか、畏敬の念を以て設計したいと初めから考えていました。

でも、ご存知の通り、敷地にはかなり制限があります。特定用途地域内で、各種条例の制限もあります。結果、学

空撮写真

校側からお話のあった教室をすべて入れようと思ったら、あの建物形状しかない。そして、そうすると、既存校舎を特徴づけているベランダは、狭くて取れないんです。

ベランダが取れないということは、暑い寒いや日差しを和らげることができないということです。…そう考えていくと、ルーバーで調整するしかない、と方針が決まりました。

理事長から海外の私立学校の素晴らしい事例なども見せていただいていましたし、既存校舎との調和、そして新校舎の顔としての役割も考えると、木のルーバーがいい。本物の「木」を使うということは自然素材ゆえのリスクも色々あるのですが、『本物が好き、フェイクは嫌い』という理事長の言葉に背中を押されて、天然木としました。」

―ルーバーもそうですが、ステンドグラスも特徴的ですよね。下足箱などの色彩も、あのステンドグラスから採られていました。

「ステンドグラスも、最初からキーワードとしてありました。当初想定していたのは、ブルー系を基調とするシンプルなものでしたが、最終的には理事長がお考えになった今の『青い鳥』というメッセージ性のある図柄になりました。」

―そしてもう一つ、いわゆる『学校』という施設からは想像できないくらい、素材や納め方のクオリティが高いというのも、第一印象としてありました。

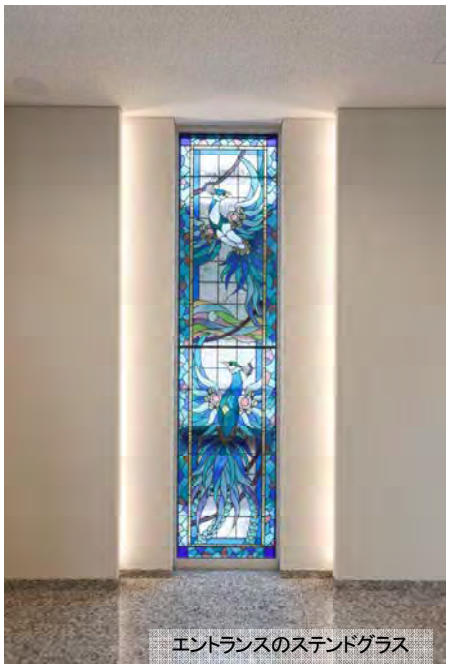
「そうですか?…これは最初に訪問させていただいた時から感じていることなのですが、大手前は、理事長も先生方も、皆さん本当に生徒を大事にされていると感じます。私が公立育ちだからかもしれませんが…。

でも、その生徒への想いに気持ちを動かされました。『生徒を大切にしたい』、その先生方の想いを建物に反映させた結果、丁寧な納め方になっているのかもしれませんね。」

―ああ、それはとっても素敵な理由ですね。建物が図面として固まるまではどのくらい打ち合わせを重ねられましたか?

「うーん、それはもう回数が分からないくらい重ねています(笑)。外観や構成を大枠ではすぐに気に入っていただけましたが、実際に様々な仕様を決めていくには細かな打ち合わせが必要ですから。今回は学校から指示書があったわけではなく、ご意見を伺いながら進めさせていただきました。」

―定例会もしっかり行われていたような印象があります。



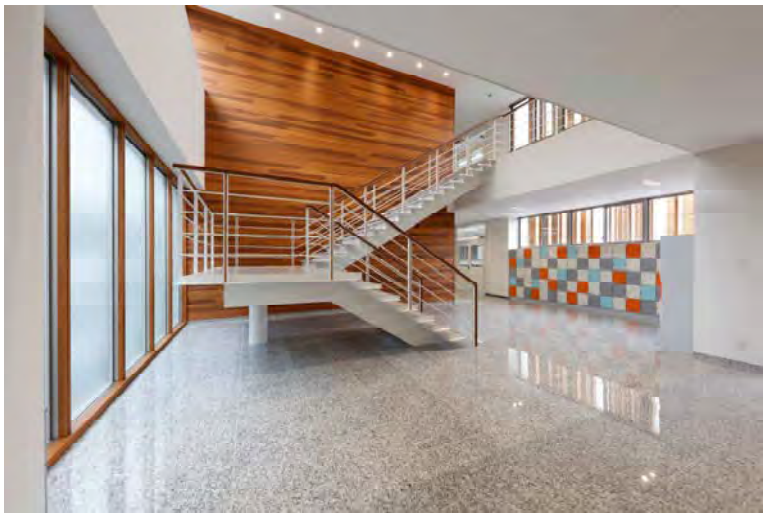
エントランスのステンドグラス

「建物の大枠を決めるまでは理事長との打ち合わせが主でしたが、実際に『どう使う?』をご相談する相手は先生方になります。そのため、先生方との意識のすり合わせという意味でも、定例会はまめに開催するようにしました。

『せっかくなら最新式のシステムを』というのも、その中で先生方から出てきたご意見なんですよ。生徒のためはもちろんですが、これからの教育を担う先生方の展望や自負が込められていると思います。」

―今回の建物は規模の大きいＲＣ造で、「女性の建築士は住宅が得意」と思われがちな中、珍しいような気もします。

「女性建築士＝住宅が得意、というイメージは、確かにありますよね。でも実は、私は独立したときから病院や店



舗、各種施設を志していたんです。大手ゼネコンの鹿島建設 設計部、現代建築計画事務所、という経歴を経て独立しているので、どちらかといえば大規模建築ばかりを経験してきました。

ただ、学校は公共工事であることが多いですから、今回が初めてでした。」

―そういえば、永野さんはなぜ建築家になったのでしょう?

「実は高校時代は医者になりたかったのですが、かないませんでした(笑)。

でも、ちょうど二〇二〇、二〇二一年と、文化庁による近現代建造物緊急重点調査事業(建築)が香川で行われているのに参加していて気づいたのですが、その対象の中に、自分が昔好きだった建物がけっこうあるのですね。

県庁の近くに住んでいましたので、学校の帰りに県庁広場で丹下健三やイサムノグチの空間を知らず知らずに味わってもいるんです。また、庭を取り込むような大きな窓のある祖母宅の応接間がお気に入りでしたし、ピアノの発表会などで訪れるホールの厳かな雰囲気や照明などにドキドキする感覚などもよく覚えています。

『好きな空間に行ったときの気持ちの躍動』のようなものが、きっと子供の頃から好きなんですね。」

―好きな空間に行ったときの気持ちの躍動。…すごく素敵なフレーズですね!

「そう、何に心が動くか…なのでしょうね。その『気持ちが動く』ことに対して、関わりたい、力になりたい。

『場の力』というのは、必ずあります。大手前の先生方が生徒を大切に思う気持ちに心を動かされ、今回のプールスホールが形を結んだように、心が動く物事に対して『場の力』で支えていく…というのが、私の考える建築士という仕事かもしれません。」

―最後に、今回の工事を通じて、印象に残っていることを教えてください。

「許可申請期間が長く必要な現場で、使用開始時期も決まっていたので、設計期間も工事期間も短くなり、色々な意味で『お互いに相手のことを思いやる』ことを再認識した現場でした。

そういえば、ちょっと余談になりますが、こんなことがありました。もうほとんど建物が完成した頃、打ち合わせを終えて学校を出ようとしていたら、自転車に乗った二人連れの男の子たちが、こう言っているのが聞こえたんです。

『新しい校舎、めっちゃカッコ良くない?』って。

思わずクスっとしながらも、嬉しい気持ちが湧いてきたことを、今も覚えています。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まだまだ男社会といわれる建設業界で、ピンと背筋を伸ばし、建築設計のプロとして道を歩んできた永野さん。ご両親の看護や介護をされた経験から、医療・介護福祉施設について、理想の空間をつくり出せるよう勉強を続けられているそうです。

様々な記憶や経験を柔らかに乗り越えてなお、「心を動かされたことに対して係わりたい、力になりたい」という純粋な思いを持ち続けて設計をされている姿に、私もまた勇気づけられたインタビューでした。(現場監督インタビュー)

↑校舎入口

利庵(りあん)一級建築士事務所
〒760-0007 高松市中央町3-5

現場監督へのインタビュー

工務部建築課　／リーダー　西尾孝弘、吉井貫智

左/西尾孝弘、右/吉井貫智

―まずは、高松大手前の現場、お疲れさまでした。西尾さんはベテランですが、吉井さんはこれが実質のデビューでしたね！

吉井「初めてのRC造なので、足場が取れた時には感動しました。」

西尾「建築学部出身ではないですし、最初はトランシットって何？というところからでしたからね。よく頑張ったと思います。」

―西尾さんは後輩を育てるのは得意なようにも見えるけど、一年生を預かることに緊張はありませんでしたか？

西尾「初めて会った時、素直で声を張ってモノを言う、面白い話にもついて来てくれるのを見て、『この子やったら一緒にいけるな！』と思ったんです。そこで、まずは基礎の写真をピッタリついて指導しながら撮影したら、センスがある。吉井君が来てくれてラッキーと思いました。それ以降の写真は、吉井君がメインでこなしましたからね。」

―最初に覚える仕事は写真なんですね。

西尾「レベルとトラ（建物の直角や水平基準線を出す測量機器）から現場仕事は始まるんですが、仕事を覚えるのは工事写真の撮影ですね。」

―それはなぜ？

西尾「写真って、ウソを撮れないじゃないですか。なので、その現場の状態が『正しい』のか、設計図や施工計画書をひとつひとつ見て確認しながら撮影するわけです。それを繰り返していくことで、仕事を覚えていく。同時に、周りの状況を把握して写真を撮らなければならないので、現場監督としてのセンスも問われます。吉井君は、最初からセンスがあった。純粋に写真のフレーム取りが上手いというのもありますが。」

―吉井さんはすぐにコツが掴めたの？

吉井「写真は後に残るものですよね。なので、綺麗にして撮らないとな、と意識していました。」

西尾「その気持ちがあるから、職人さんに指示が出来るんですよ。例えば『ここは写真撮るから、綺麗に掃除しとってな』とか。」

―職人さんはお父さんくらいの年の人も多いでしょうし、いきなり指示するのは難しくなかった？

吉井「だから、プライベートな話も混ぜながら…。その中でお願いをするようにしていました。」

西尾「例えばある職人さんの弟が美容師をしていることが分かったら、『じゃあ、僕の髪切ってもらおうかな』と切りに行く。吉井君はそうやって丁寧にコミュニケーションをとっていたので、『吉井君吉井君』ってすぐに呼んでもらえるようになっていましたよ。」

―今回の現場で大変だったのはどういうところでしょう。

西尾「RCなので躯体は大変でしたが、仕上げは難しいわけではなかったんです。ただ、学校という場所柄、第三者災害には気を遣いました。あと、見て分かるように立地も独特です。山に面しているので周りは石垣や法面に囲まれていて、進入路は一か所。しかも急な傾斜の坂道を上ったところすぐが工事現場です。仮囲いの位置を決める際にも生徒たちの通学動線を考えないといけませんし、工事車輌が入れる時間も決まっているので、吉井君は走り回っていましたよ。」

―走り回る？

吉井「車輌は入れない時間なのに業者さんが来てしまったり、早く出ないといけない時間なのにまだ出ていなかったり…。それを走り回って止めたり促したりしていました。」

西尾「既存校舎の改修工事もあったので、その時も吉井君は走ってましたね。工事時間の制限があるので、時間が来たら鍵を借りて、現場を指示して、終了時刻が近づいたら『早く仕舞いして出てよ』と職人さんに知らせて…。また、工事車輌が通る場所に石畳があったんですが、それを傷めないように工事を進めるにはどうするか、という問題もありました。」

―どうしたんですか？

西尾「鉄板を敷いて保護するというのが一般的ですが、そうすると、雨が降ると滑りますよね。先生に聞くと、朝

工事現場のロケーション。急な坂を上った先にある

はそこを生徒の皆さんが自転車で通行するそうで、『じゃあ、鉄板を敷きっぱなしにすると段差も出来るし、どうなんだろう?』と。…考えた末、大型車両が通行する基礎掘削・埋め戻し・コンクリ打設の時だけ、石畳を保護するマットを敷いて対応することにしました。ですので、その設置・撤去作業の指示でも走り回っていましたね。」

―なるほど。進入路が一か所しかない訳ですが、工事はどう計画したの?

西尾「1~3工区に分けて、それぞれ工程がラップしないように、順番に計画しながら進めていきました。」

―でも、搬入できる場所も当然一か所なわけでしょう?

西尾「だから、昼礼で日々の材料搬入の時間調整をします。各々の業者の状況を把握して、互いの都合を聞きながら譲り合ってスムーズに搬入できるように、現場監督が調整していく。」

―それも吉井さんが?

西尾「そうです。実は吉井君は、声がビックリするほど大きいんですよ。」

―え?優し気な雰囲気なので、声がそんなに大きいとは思っていませんでした。

西尾「野球部だったんで。な?」

吉井「そうなんです。三塁ランナーコーチで、監督とランナーを繋ぐ役割なので、声を出して指示を伝えないといけなかったんです。」

西尾「吉井君がしっかり声を張って朝礼をしてくれるので、場が締まりましたね。」

―若い子が大きい声で朝礼してくれたら、それだけで気持ちがいいですよね。

西尾「はい。で、それを『今日は吉井君良かったわ~!最高!』とか言って励ましていました(笑)。」

―(笑)。施工上で面白かった点は?

西尾「PC梁ですかね。今回の建物は、当初、永野先生が鉄骨造で提案をしたところ、『RC造がいい』というお客さまの要望で変更された…という経緯があったと聞いていますが、初めに永野先生が鉄骨造で提案された理由は、多目的教室について広く空間を取りたかったからです。つまり、RC造は鉄骨造に比べてスパンを飛ばせないので、大空間を作りにくい。なので、RC造でそれを実現するために、構造計算をして、PC梁を採用されたと聞いています。」

―PC梁とはどういうものですか?

西尾「普通PC梁(プレストレストコンクリート)というと工場で製作したものをイメージするかもしれませんが、今回はトレーラーが現場に入れないので、現場打です。ポストテンション工法(現場緊張)という工法で、現場打の梁にセットされたシース管内にPC鋼線(緊張力を半永久的に維持できる)を挿入し、コンクリート強度発現後にそのPC鋼線を緊張してプレストレス力(圧縮力がかかった状態にする事で引張力に弱いコンクリートの弱点をカバーする)を導入する工法となります。昔はよくやっていたそうですが、私は初めてだったので、面白かったです。」

―なるほど。他にはありますか?

西尾「建築本体とはあまり関係が無いのですが、水路の計画ですね。裏山から大量の雨水が下りてくる、その水を処理するための水路を付け替えたのですが、『半端ではない水量だよ!』と学校の方からも脅されて(笑)。どのくらいの水量を想定すれば良いのか、どう迂回させればいいのか、決断するまではそればかり考えていました。」

―そうだったんですね。それもまた、新しい経験でしたね。それにしても、吉井さんは、どうしてそんなに頑張れたの?

吉井「自分自身が建築を分かってないから、1からスタートだということは分かっていて…。西尾さんが、僕が間違ったことに対して言ってくれたりすることが、『自分のために言ってくれている』と伝わりましたし、そう思えたんです。」

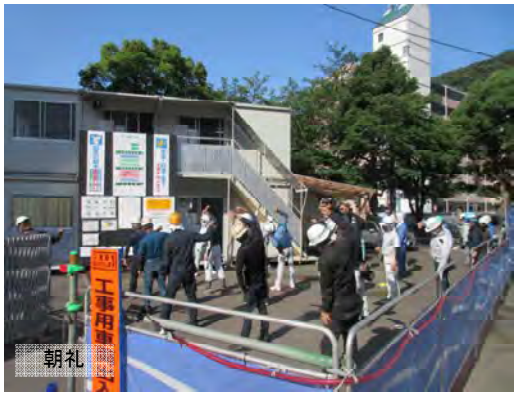
―「何言いよるんや、意味わからん」とか、反発の気持ちはなかったの?

吉井「意味が分からないのは当たり前なので。」

―吉井さん、すごいね!

西尾「ね、すごいでしょ。私が言わせているわけじゃないですよ(笑)。でも、そのひとつひとつが、彼の場合は身になっていったという感じですね。」

―あの短工期であれだけのクオリティを仕上げたのはお見事でした!お疲れさまでした。【物語のある建築(31) 了】



朝礼

天然木を使ったルーバー。強度や反りを考えて集成材としているが、小口も全て柾目としているため、無垢材のような風合いに。

実際の寸法を見ながら、黒板(ホワイトボード)の高さを決めているところ。

中津万象園を愛した京極のお殿さま、高朗公の漢詩集

「琴峰詩抄に親しむ（5）」

丸亀をこよなく愛した京極家六代目藩主 高朗公(号を琴峰と称する。1798-1874)の漢詩集【琴峰詩抄】より、詩をお届けいたします。

旅の途中で、また領内のあちこちで、詩の題材を発見して歩いた“琴峰さん”。このお殿さまは漢詩を趣味とし、生涯に一万首にも及ぶ詩を詠んだといわれていますが、日々の喜びや出来事などを丁寧に詠った詩の数々は、まるでお殿さまの体温が伝わってくるようで、知れば知るほどあたたかい気持ちになってきます。

その中から、まずは8回にわたって、お城から中津万象園へ至る道の情景を詠んだ漢詩をご紹介します。

八月朔赴多度津途上(巻三)

輕裝小隊去尋涼。行過槐堤又柳塘。
含露田頭禾穂重。迎風畦畔豆花香。
軟沙汀外鷗成社。淺水池中魚作行。
馬首殘雲漸收盡。忽看隔樹出朝陽。

身軽に涼を求めて城を出、槐の植わった堤や柳の生えた小さな丘を行き過ぎる。露を含んだ田では稲穂が重く垂れており、風に吹かれて田んぼの畔に咲く豆の花の香りが漂ってくる。柔らかい砂浜の汀ではカモメが群れをなし、池の浅瀬では魚が列をつくっている。馬の首をようやく雲のなくなったほうへ向けると、ちょうど木の間に朝日が昇るのが見えた。

【編集後記】新型コロナウィルス感染症の影響を大きく受けた令和2年度、「これほどまでに日常とは脆いものだったのか」と愕然とする思いで日々を過ごした方が殆どではなかったでしょうか。そしてまた、アフターコロナを合言葉にこの状況からいかに立ち上がるのかを必死で模索する一方で、『資本論』が注目されたり、山口周さんの『ビジネスの未来―エコノミーにヒューマニティを取り戻す』が流行したりと、これまでの『マネタイズの効率化』『消費すること』を指標に置いた経済活動に一石を投じるような世論の流れが明確になった年でもありました。

そんな中、富士建設では昨年度、「事業の目的に立ち返る」ということを意識して一年を過ごしてきました。その一つが「地元企業がこれからも事業継続が出来るよう建築を通じて支える」既存不適合の建物の遵法化支援の開始であり、そしてもう一つが、「建設業界及び従事者の地位及び所得向上を目指す」見積エントリーシステムの開発導入です。いずれも日経新聞に掲載いただくなど、地味な一歩ではありますが、その大義を認められたと感じています。

多くの企業において、「お金儲けがしたい」だけで創業、事業継続をすることはありません。雇用の責任、様々なリスクの存在、―それでもなお、なぜ事業を続けるのか、起こすのかを経営者に尋ねれば、そこにはきっと『大義』があるはずです。でも、時には効率の良い利益追求と相反するそれらを、地元企業が堂々と語ることが青臭く綺麗事だとされがちだったのが、今までの時代だったのかもしれません。

アフターコロナの時代。前述の世論が真実の動きならば、それは、大義を真摯に語り、事業として目指すことが当たり前となる世の中の到来なのでしょう。この【ハレとケ通信】でご紹介してきたのも、まさにその『建築主の目指した大義の物語』であり、それに心を動かされ、実現への伴走をした弊社社員の物語でした。

『未来を良い方向に変えたいと行動する人を応援する』ことが、私たちの仕事です。アフターコロナも、皆様の大義に寄り添い、思い描く未来を共に実現していきます。どうぞご支援を賜りますようお願い申し上げます。　（代表取締役　真鍋有紀子）

**********御意見、御感想をお聞かせ下さい**********

FUJI　地域未来牽引企業

建設業許可：香川県知事許可（特 28）第189号／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録(10)第1997号

富士建設株式会社

本社：〒769-1101 三豊市詫間町詫間300番地1
TEL0875-83-2588（0120-832589）
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail　y-manabe@fujikensetsu.jp　（真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。
また、県下において 1300 区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処　懐風亭
■富士ホールディング(株)／フジ開発(株)／(有)住まいの創夢／(株)久保田工務店